

佐野賢治・谷口貢・中込睦子・古家信平編  
『現代民俗学入門』

安藤 耕己<sup>※</sup>

「はしがき」にあるように、本書は『民俗研究ハンドブック』（1978）の改訂版として企画されたものである。『民俗研究ハンドブック』は1970年代までの民俗学の研究蓄積を示す性格のものであった。それに対し本書では、その性格をあえて踏襲しない。民俗学研究の多様化に対応し、村落研究を基本とした従来の研究分野を再検討することが本書企画の出発点となっている。そして現在の民俗学の課題に見通しを与えるため、また「発言する民俗学」として社会的役割を担うことを主眼とするため、研究が資料的・分析的にも不十分な分野も積極的に取り上げたとする。執筆者・編者も30代から40代の若手研究者が中心となっている。

本書の内容構成と執筆担当者は以下の通り。

民俗学の目的と課題

- |               |       |
|---------------|-------|
| 1 民俗とは        | 谷口 貢  |
| 2 口承と書承       | 古家信平  |
| 3 認識と記述       | 中込睦子  |
| 4 比較の視野       |       |
| — 国際化の中の民俗学 — | 佐野賢治  |
| I 自然と民俗       |       |
| 1 自然観の民俗      | 篠原 徹  |
| 2 生態系と民俗技術    | 安室 知  |
| 3 衣生活と地域性     | 宮本八重子 |
| 4 住居と世界観      | 宮内貴久  |
| II 神の民俗誌      |       |
| 1 カミとホトケ      | 谷口 貢  |
| 2 霊的職能者と社会    | 赤嶺政信  |
| 3 託宣と芸能       | 永松 敦  |
| 4 人神信仰        | 長谷部八朗 |

※筑波大学大学院歴史・人類学研究科

III 人と人の絆

- |                     |      |
|---------------------|------|
| 1 「ムラ」社会の構造         | 小熊 誠 |
| 2 「家」と血縁幻想          |      |
| — 親子の“絆”をめぐる民俗的思考 — |      |

岩本通弥

- |                   |       |
|-------------------|-------|
| 3 「内なるもの」と「外なるもの」 | 伊東久之  |
| 4 女性の民俗           | 倉石あつ子 |

IV 生と死

- |            |      |
|------------|------|
| 1 日本人の死生観  | 浅野久枝 |
| 2 生きがいと労働観 | 湯川洋司 |
| 3 子供と老人の役割 | 飯島吉晴 |
| 4 死の民俗     | 池上良正 |

V 現代社会と民俗

- |                     |      |
|---------------------|------|
| 1 過疎化と村の再生          |      |
| — 地域社会の変化と民俗変化 —    | 山本質素 |
| 2 都市の場              | 野沢謙治 |
| 3 癒しの民俗             | 嶋島 直 |
| 4 移民の民俗             |      |
| — 物質文化から見た日系移民の民俗 — |      |

後藤 明

VI 国家と民俗

- |              |       |
|--------------|-------|
| 1 伝統教育と近代教育  | 鳥兎沼宏之 |
| 2 若者と国家      | 岩田重則  |
| 3 生活改善と民俗の変貌 | 野村みつる |
| 4 戦争と民俗      | 松本博行  |

上掲の構成を見ると、『民俗研究ハンドブック』や『日本民俗学概論』（1983）で課題、また特論としてあげられていた民具、都市民俗学、沖縄研究、比較民俗学、過疎と民俗の変貌、民俗調査論等に関わる論考が本論として収められていることに気づく。また現在、我々の眼前にある問題を直視する視点からの論考、従来の研究では意識されつつも正面切って論じられてこなかった問題意識に基づく論考が見受けられる。『ハンドブック』で法令を載せることによって示していた、国家と民俗の関係への意識も、本論として一つの章を成している。『ハンドブック』『概論』刊行よりおよそ15年経つが、その中で民俗学がいかなる方向性を模索してきたのかが端的にうかがわ

れる内容となっている。

以上述べてきたように本書は内容が余りにも多岐にわたっており、字数の限られた当欄で各内容を評するのは甚だ困難である。そこで当誌の性格を鑑み、佐野賢治氏の「4 比較の視野」を中心に本書の中核を成す章である「民俗学の目的と課題」を以下評していくことにする。この点各執筆者には何卒ご容赦願いたい。

「民俗学の目的と課題」では、「1 民俗とは」として谷口貢氏によって簡潔に民俗学史がまとめられ、現代社会における現在学、内省の学としての民俗学の意義と可能性が示されている。ここに本書を貫徹する姿勢が表明されているといえよう。

「2 口承と書承」では、古家氏が従来の民俗研究で資料論として意識されてきた口承と書承の問題に、知識情報の獲得手段によって事物の評価の仕方が変化するという観点を示す。そして沖縄の字誌編纂の事例をひき、「民俗学が民俗社会の人々のいづく観念を抽出するものであるならば、そこから発信された情報を解説する必要がある」(p.11)とする。これは次節で中込睦子氏が指摘する、「記述されたもの」への認識と連なるものである。

「3 認識と記述」で中込氏の指摘するところによると、従来行なわれている聞き取り調査で得られた資料は、話者の解釈と調査者の解釈という、二重の主観を経たものである。そして事実上、語られた内容だけにあるのではなく、語りの場の全体の中にある。つまり、調査に臨んだ時、そしてそれを記述したものを読む時、我々は常にそれが語られ、また記された状況と背景に目を配らせていかねばならないのである。

各々の研究者によって得ようとするものは異なるではあろうが、聞き取りという資料収集法を用いる際、常に意識せねばならない問題である。

「4 比較の視野」は、筑波大学比較民俗

研究会のメンバーである佐野氏による論考である。以下詳細に評していきたい。

佐野氏は「橋の象徴性—比較民俗学的一素描—」(1990)で次のように意志表明をしている。

柳田国男は一国民俗学がそれぞれの国で成立して後の比較研究を考えて、比較民俗学を時期尚早と考えたとされる。生物学的範疇である人種、同文化集団である民族、政治的カテゴリーである国民という概念に人間はそれぞれ属するわけだが、民俗学はムラ→国への志向の強さから、民族形成、民俗の多元性などに対する関心が弱い恨みがあった。内発的な自己認識、国学を志向するなら別だが、先の言い方は逆に比較民俗研究があって始めて一国民俗学が成り立つとしたほうがより実際的ではないかと、中国における民族識別などに関係して思うのである。アイヌ民族、南西諸島の民俗文化の扱いなど、日本民俗学が必ずしも一国民俗学を確立したと言えない現状には、民族と国家の関係を正面から問題にしてこなかったところにもその一因があるのだろう。異民族間の民俗比較については他の機会に論じたいが、異文化を対等に見ると言うより、自文化を軸足にして、他文化との比較を通して自文化をより相対的に見つめ直すところにその意義がある。(佐野 1990 p.436)

そして「…民族と国家の関係が世界的に問われている今日、郷土研究から出立した民俗学の民族文化に対する解答が改めて問われており、この意味でも比較民俗学的視点が要請されているのである」(同 pp.436-437)と締め括っている。

本書の佐野氏の論考もここに示した課題を展開させたものといえる。内容は「民俗学における2つの比較」「日本人とは一人種・民俗・国民」「ムラの民俗とクニの歴史—伝

統と近代の相克—」「民俗性と民族性—比較の現在—」の4つの見出しで括られている。

佐野氏はまず「民俗学における2つの比較」で民俗学において用いられてきた比較の二つの意味を整理している。佐野氏によるとそれは日本国内での資料操作法としてのもの、そしてもう一つは一国民俗学に対する比較民俗学である。佐野氏は後者に関してこう説明する。「空間軸、横並びの他民族の民俗文化との比較によって日本人らしさを明らかにしようとする方法論であるといえる」(p.21)。そして柳田民俗学の比較民俗への指向性を評価する立場で、従来の民俗学が柳田の指向から外れ、村落の個別分析の観点で背景として民俗誌が作成されていった経緯を示す。さらに「これらの民俗誌から日本文化論へと展開する方法・視点は不備のままであった。日本文化に対する民俗学からする発言も低調にならざるを得なかった」(p.22)と断じる。そして国内資料は蓄積・整理され、中国・韓国などでの民俗学研究も整備されてきた現在、2つの比較を連関させて内外からの視点を以て日本の民俗文化を論じるに機は熟したと氏は見るのである。

「日本人とは」では先に掲げた課題である人種・民族・国民という概念を検討しながら、従来曖昧にされてきた「日本人」という言い方に疑問をなげかける。そしてエスニシティ論を援用しながら、結局従来の日本の民俗学の態度が大和民族の民俗学であったとする。そして「日本人とは何か」という問題を民族・国家の問題と正対しながら考える視点が必要であるとする。つまり、従来の民俗学が日本人という概念に常に均質性を前提とし、また日本人という言い回しの中に眼前の民族問題を隠蔽してきたということを指摘する意図が感じられるのである。

そして「戦後から今日に至るまでの民俗学も家々の神棚に代表される民俗事象に目を取られ過ぎ、その背後にある国家の存在を等閑

視しすぎていた」(p.23)と民俗における国家の影響への着目を訴える。

「ムラの民俗とクニの歴史」では、近代化というのは一面から見るとムラ人(民族)を国民に変える作業でもあったとする。ここで佐野氏はムラで行なわれた伝統教育と近代教育を対照的にとらえ、近代教育は結論としてムラ人の国民形成を目的としたものであったと断じる。しかし、24ページに掲げられた伝統教育と近代教育の対照図は本文の記述だけではよく理解できないところがある。もう少し図の説明を補ってもらいたかった。

「民俗性と民族性」では、同一民族集団内で地域性を踏まえた上で把握される民族の性格を“民俗性”と定義し、他の民族集団との接触・交渉によって意識された民族の性格を仮に“民族性”と定義する。この両者が合わさった形で一つの民族の性格が示されるという。そして民俗学の二つの比較、比較研究法と比較民俗学はそれぞれ民俗性と民族性を明らかにする方法ということになり、民俗学と民族学の関係にも連なっていくことになるのだという。前者だけの視点では、偏狭なナショナリズム、「島国根性」に陥ってしまう危険性もあると指摘する。

そして「橋の象徴性」で示した指向をより強く打ち出している。

自文化を軸足としながら他文化との比較の上に、自文化を相対化する視点、比較民俗研究がこのような国際化の時代にあって必要ではないだろうか。等身大の互いの生活文化を知り合うことこそ、遠回りのようでも真の意味での異文化理解、国際理解につながる。(p.26)

「橋の象徴性」では「異民族間の民俗比較研究の意義」として示した指向を、はっきりと「比較民俗研究」として打ち出している。しかし、この引用部は舌足らずではあるまいか。佐野氏の言説では、異文化は自文化相対化のための装置として用いられるのである。

つまり、自文化と異文化との間に対等関係はないはずである。これは「橋の象徴性」で佐野氏も明言していることである。果たしてこの態度が「等身大の互いの生活文化を知り合うこと」になり、「真の」異文化理解になるのであろうか。佐野氏の言説に従えば、異文化理解をした上に自文化の相対化がなされるはずである。この点、もう少し言葉を補って頂きたかった。

また、ここで示されたのは佐野氏の比較民俗研究の定義であるが、これは異文化の民俗調査に携わる者の姿勢である。我々が自覚すべき態度としては納得できるが、これを研究というのはいかがであらうか。

さらに、全体にこの文章は「比較の視野」という表題であるが、前掲の「橋の象徴」の引用部に示された問題意識を敷衍させた内容となっている。すなわち、従来の民俗学が人種・民族・国民という概念を意識せず、民族形成、民族の多元性などに関する関心が弱かったことを指摘する。しかし、それが比較研究の意義へといかにつながるかは評者の浅学ゆえかはっきりしない。同じく、この文章でも「日本人とは」と「ムラの民俗とクニの歴史」のつながりはわかるが、これが比較民俗研究の態度といかにつながっていくかが理解し難い。

しかし、これも佐野氏が「発言する民俗学」を意識し、多くの問題意識を限られた紙数にあふれんばかりに詰め込んだ所産であると思われる。また氏のいう比較民俗研究も今後の仕事によって評価され得るものである。今後の氏の研究の進展に期待したい。

さて、新聞の本書の広告欄、本書の帯、背表紙にも「発言する民俗学」の文句が踊っている。福田アジオ氏が中心となり、柳田の初志を評価する立場で1970年代から提唱されてきた指向性が、ようやくに本書に結実したものと筆者は評価する。ただし、本書の各内容が「発言する民俗学」の姿勢に揃っているか否か、また、その発言が社会に向けてのもの

なのか、学界に対してのものなのか、各々態度は異なるようである。また、各内容が今後民俗学の研究分野として確立していくか否かも今後の研究の進展に見ていくほかない。いずれにしろ、民俗学の新たな可能性に対しての決意表明の表れとして本書を積極的に評価したい。

最後に、本書の一部の記述をめぐって引用のルール違反という指摘がなされる一幕があった。この問題が生じたのは、本書の記述の様式によるところが多いのではないかと思われる。入門書という性格上、注釈や出典を厳密に示さなくてもよいとの判断であったと思われるが、せめて「～によれば」という程度でも説や事例の出所を示すべきではなかったのかとの感が持たれる。いかがなものであろうか。

#### 【参考文献】

- 上野・高桑・野村・福田・宮田編『民俗研究ハンドブック』吉川弘文館 1978  
植松明石「日本民俗学の動向と展望（三）十年の後に」  
（瀬川・植松編『日本民俗学のエッセンス [増補版]』ペリかん社）1994  
佐野賢治「橋の象徴性—比較民俗学的一素描—」  
（竹田旦編『民俗学の進展と課題』国書刊行会）1990  
福田・宮田編『日本民俗学概論』吉川弘文館 1983